

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
小児がん拠点病院を軸とした小児がん医療提供体制のあり方に関する研究
分担研究報告書

研究分担者 足立 壮一 京都大学医学研究科人間健康科学系専攻 教授

研究要旨

当院における小児 / AYA 世代のがん患者へのがん相談支援の実態を評価した。この世代へのがん相談の需要は高いが、必要な相談支援を利用してもらうには相談員の積極的な働きかけが有効であることが示唆された。また、この世代に対してもピアサポートの需要は高いことがわかったが、ピアサポートが軌道に乗るためにはスタッフによるサポートが必要かつ有効であることが示された。

A . 研究目的

小児 / AYA 世代のがん患者へのよりよい支援体制を構築するため、がん相談支援センターにおける相談件数や相談内容を調査し、さらに当院でのピアサポートや患者会などを通じたサポート体制の実態を把握する。

B . 研究方法

平成 26～27 年度におけるがん相談支援センターの小児 / AYA 世代のがん患者への活動内容の実態把握を行い、また、同センターが支援するピアサポートの実態を検討した。当研究は、個人情報の調査は含まれないため、倫理委員会への申請は必要ないと考えられる。

C . 研究結果

1) がん相談支援センター実態調査

平成 27 年 4 月から平成 29 年 3 月までにがん相談支援センターにおいて、小児 / AYA 世代の患者もしくは患者の保護者などが相談や支援を持ちかけた実数とその相談内容

に関するデータを収集した。平成 26 年度と 27 年度における対象患者数はそれぞれ 866 人、1336 人であった（表 1）。このうち患者本人からの相談は 1 割にも満たず、6 割が家族からであった。また、医療者からの相談は 1/4 にも及んでおり、これら 3 者が相談者の 9 割以上を占めた。なお、相談の形態は 9 割が直接の面談によるものであり、他は電話相談であった。相談内容では医療費・生活費・社会保障制度、就学・就労、がん治療、不安・精神的苦痛が上位を占め、両年度とも類似した傾向を示していた。

2) チャイルドピア(小児がん患者向けピアサポート) 実態調査

当院では 25 年 11 月より、成人のピアサポートにならって、小児がん患者とその家族を対象にしたピアサポートである「チャイルドピア」を開催し、月 1 回がん相談支援室スタッフや患者会などのサポートをうけ、ミニレクチャーや情報共有、相談の場を提供している。平成 26～27 年度における参加者の実数は表 3 のとおりで、増加傾向に

26年度	件数		人数	割合
4月	55	患者本人	61	7.0%
5月	69	家族・親戚	531	61.3%
6月	54	友人・知人	3	0.3%
7月	82	一般	0	0.0%
8月	51	医療関係者	220	25.4%
9月	83	その他	51	5.9%
10月	90	合計	866	100%
11月	64			
12月	71			
1月	75			
2月	93			
3月	79			
合計	866			

あった。

表1 26年度相談件数と相談者内訳

27年度	件数		人数	割合
4月	76	患者本人	123	9.2%
5月	78	家族・親戚	804	60.2%
6月	116	友人・知人	7	0.5%
7月	111	一般	7	0.5%
8月	143	医療関係者	328	24.6%
9月	149	その他	67	5.0%
10月	102	合計	1336	100%
11月	123			
12月	124			
1月	91			
2月	120			
3月	103			
合計	1,336			

表2 27年度相談件数と相談者内訳

図1 26～27年度相談内容

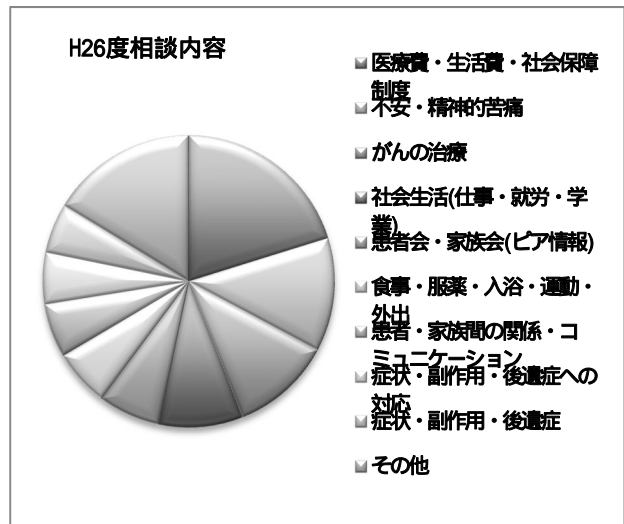
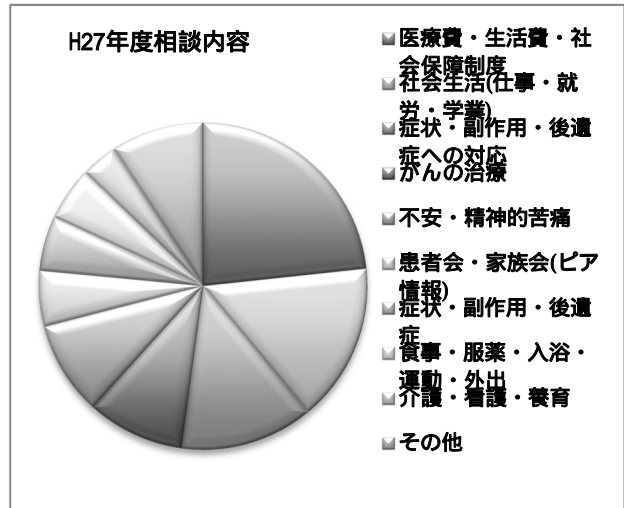


表3 チャイルドピア参加人数

	26年度		27年度	
	スタッフ	患者/家族	スタッフ	患者/家族
4月	5	11	8	24
5月	休み		5	16
6月	14	14	6	12
7月	10	9	6	13
8月	7	9	休み	

9月	7	16	8	13
10月	8	7	6	12
11月	8	7	7	12
12月	7	10	7	11
1月	14	14	5	8
2月	17	10	6	15
3月	10	13	10	6
合計	107	120	74	142

D．考察

小児がん患者に対する相談支援は、患者自身が幼少であること、家族が患児に寄り添っていることが多いなど、相談室まで足を運んでもらうこと自体が大きな障壁となりうる。がん相談支援センターでは、外来や入院病棟へ出向き、相談業務を行っていることを周知し、相談してもらえ環境づくりに努めてきた。その結果、相談件数は大幅に増加し、需要が高いことが示された。患者とその家族からの相談がおよそ7割を占め、大多数であったのは当然であるが、医療者からの相談が4分の1を占めた。その理由は、患者やその家族からの相談を踏まえた間接的な相談支援に加えて、医療遂行上の問題が含まれており、患者家族を取り巻く医療スタッフが抱える問題解決にも寄与していることが示された。相談内容に関しては、医療費や社会保障制度など経済的問題、治療の内容、社会復帰、精神的苦痛に対するものが上位を占め、年度による大きな変化はみられないことから、相談支援のある程度の手順化が可能であることが示唆され、さらなる相談件数の増加に対応するための重要なデータとなった。当院で開始したチャイルドピアに関しては当初は多数のスタッフを必要としたが、事業が定例化してか

らは少人数のスタッフで比較的多くの患者家族によるピアサポートが可能となり、本来のピアサポートの目的がより適確に果たされてきていると考えられた。

E．結論

当院における小児/AYA世代へのよりよい支援体制の構築に向けて、現状の支援体制について評価を行った。相談支援室の積極的な活動により、相談件数の飛躍的な増加が見られており、需要の高さとともに小児/AYA世代に対する支援の方法についての配慮が必要であることが示された。また、相談内容に関しては年度によらず経済的支援、医療情報、社会復帰などの需要が高く、年度による変化が少ないことから系統的な支援体制の構築が必要で、かつ、それにより相談件数の増加に対応しうると期待された。さらに当院における小児/AYA世代へのピアサポートである「チャイルドピア」活動において、継続することによりスタッフによるサポートの必要性が低下し、この世代にもピアサポート活動が必要かつ、需要が高いことが示された。

F．健康危険情報

(総括研究報告書にまとめて記入)

G．研究発表

1．論文発表

「当科における血縁ドナー選定過程についての後方視的検討」 五井理恵他 日本造血細胞移植学会雑誌 2016, 5.3: 82-86.

2．学会発表

「親の会ができること ~医療者とともに

～」 根岸京子 第 58 回日本小児血液・がん学会 / 第 14 回日本小児がん看護学会 なし
3 . その他

H . 知的財産権の出願・登録状況

なし

1 . 特許取得

なし

2 . 実用新案登録